

片面葺き替え完了!

2009年の様子



2008年の様子

2010年
葺きあがった屋根を満足げに

男鬼(おおり)楽座は、滋賀県彦根市男鬼町を中心とした山間集落の可能性を探り、文化的景観資源の保存と活用を考えることを目的としている団体です。毎年七月に男鬼町の大久保正一郎にて、茅葺き屋根の葺き替えイベントを行っています。昨年は、七月の二日から三日間開催しました。イベントには、学生を始め一般の方にも参加して頂き、茅葺き職人さんのご指導を受けながら作業を進めました。

活動は二〇〇四年から始まりました。男鬼町の基礎的調査を行い、民家単位でも集落としても地域文化財としての価値があることに気づき、情報発信に努めました。景観維持のための直接的な活動として、茅葺き屋根の補修・葺き替えを開始したのは、二〇〇七年からのことです。

二〇一〇年七月一九日三年の月日を経て、ついに屋根の平側片面の葺き替えが完了しました！暑い中、参加者が一丸となって葺き替えに取り組みました。

上の写真から二〇〇八年より年を追うごとに屋根が葺き替えられていく様子が分かります。古い茅を取り除き、新しい茅が棟に向かって徐々に葺かれていきます。二〇一〇年の写真では、棟まできれいに葺き替えられ、職人さんの満足そうな様子が見られます。

おおいろくぞ新聞



茅刈り in 伊吹山・保月

～茅刈り's high にご用心～

今年も伊吹山と保月・杉で茅刈りを行いました。この茅が来年度の葺き替えの屋根材となります。風の冷たい十一・十二月でしたが、刈り始めると寒さなんてなんのその、メンバー全員が夢中で刈っていました。

この「茅を刈ることに夢中になつて、時間が経つのも忘れてしまふこと」を茅刈り's highと呼ぶそうです。右下の写真はまさに茅刈り's highになつている楽座メンバー。お昼ごはんの時間になつても気付かず、刈り続けていました(笑) 茅刈り初体験のメンバーも鎌の使い方のコツを覚えるのと、全員黙々と作業を進めていました。



茅刈りイベント当日、茅場に到着して見たら刈る予定にしていた茅が除草されて一部なくなっている(！)なんていうヒヤッとするハプニングもありました。が、茅刈り's highな人たちのおかげか、計四回の茅刈りイベントで三三八の茅束を作ることが出来ました！来てくださった皆様、先生、どうもありがとうございました。

地域の方の声

男鬼町には現在住民がいません。元の住民も、八軒ある民家のうち三軒の家の方しか手入れに訪れていない状態です。しかし、男鬼町の誓玄米寺に何者かが侵入し、寺の一部が壊されるという出来事があった際に「寺が荒らされている。」という相談を持ちかけてこられるなど、男鬼に無関心なわけではありません。また、活動に参加して下さった一般の方々には「普段ではできない貴重な体験ができた。」との感想を頂いています。

男鬼楽座代表、ラジオに出演

二〇一二年二月二日、FM滋賀の番組『平和堂 MY DAILY LIFE』に代表の藤吉が出演し、男鬼楽座についてPRしました。

三〇分の番組の中で、時間いっぱい男鬼の魅力と、私たちの活動について情報発信できたと思います。今年度はラジオの他に、京都新聞にも葺き替えイベントの様子を取り上げられるなど、様々なメディアに注目されました。これをきっかけに、多くの方が私たちの活動に興味を持ち、来年度以降のイベントに参加

一年を通しての

成果課題

成果

五月、今年度の活動の見通しを立てるために、男鬼町の見学に行きました。そこで、集落が荒らされているという現状を目にしました。

六月は富山県で行われた茅葺きフォーラムに参加し、茅葺きについての知識を得、イベントに向けての準備を行いました。

七月の葺き替えイベントには総勢七〇名の方に参加して頂き、平側片面の葺き替え完了という節目を迎えることができました。

八月は楽座メンバーが男鬼でキャンプを行い、集落の清掃をしました。

九月は大学生地域再生活動団体サミットに参加しました。他大学の団体と意見交換をし、男鬼の現状を外部に発信できました。

二・一二月には茅刈りイベントを行いました。全員夢中で刈ったかきもあり、前年度より多くの茅束を作ることができました。

私たちの課題は、活動のメインが茅葺き屋根の葺き替えイベントとなっており、男鬼集落全体の保存・活用にはまだ至っていないことです。元住民の方や地域の人々と交流を深め、男鬼の今後を共に考えていく必要があります。

古民家楽座新聞

発行日：2011/3/31



プロジェクト紹介

私たち古民家楽座では、民家や景観の保存・活用をテーマに活動しています。イベントや調査を通じて、古民家の魅力を発信し、地域の方々に古民家の魅力を再発見していただくきっかけ作りができれば、と考えています。

今年度は、彦根市花しょうぶ通りでまちあるき、白谷荘民俗資料館での民俗調査を中心に行ってきました。今後もこのような活動を通じて、民家や景観の保存・活用を図っていく予定です。

活動メンバーは、人間文化学部地域文化学科の濱崎・石川研究室のゼミ生が主体となっています。みんな、建物が大好きなメンバーばかりです。

地元の方の声

まちあるきイベント後に、参加者の皆さんにアンケートに答えて頂きました。みなさん、もともと古民家に興味があったそうです。これまで実際に中に入る機会がなかったけれど、まちあるきの際に実際に中に入っで、説明を受けながら見ることで、新しい発見があったり、参加して良かった！と言っていただけでした。

実測調査のときも、地域の方に「伝建の調査？お疲れ様。」と声をかけて下さることもあり、私たちの活動を温かく見守って頂いています。

課題と成果

今年度は、花しょうぶ通りにおいてまちあるきイベントを開催し、地域の方に古民家の魅力を発信することができました。また今年度からの白谷の調査は順調に進んでおり、これからも継続して進めていきたいです。

課題としては、私たちの活動は建物中心に見ているので、地域の一部の方としか関われておらず、地域の方全体との交流に至っていません。もっと積極的に、地域の方とお話して、古民家の魅力を発信していきたいと思っています。

白谷荘民俗資料調査

今年度から、高島市の白谷荘民俗資料館にて、民俗調査を行いました。「古民家楽座なのに民俗調査？」とびっくりされるかもしれませんが。ここはもとと資料館だったのですが、現在は閉館されており、再び資料館として活用することを目的に、この活動を行なっています。なんと、この資料館自体が、湖西地域の伝統的な形式をもつ茅葺き屋根の古民家なのです。

地域文化学科の先生方やゼミ生と一緒に、毎月一回資料館で教科書整理や民具調査をしてきました。

茅葺き民家の資料館として再開させるために、今後も調査を進めていきます。下の写真は、楽座メンバーが民具の特徴を観察し、カルテに書きこんでいるときの様子です。



かわいい民具、発掘！

白谷荘民俗資料館にて、民具調査中に、こんなかわいい民具を発見！石を目に見立てるとウサギに見えませんか？民具調査は、古い埃をかぶった民具を眺めて、書類に特徴を書いていく、実に地味な作業なのですが（笑）、そんな中でも、たまにこんなかわいい民具を見つけると、皆に「見てよー！」と自慢しあいながら、皆で楽しみながら作業しています。この調子で来年度も、かわいい民具見つけながら、調査をより頑張っていきます。

ちなみにこの民具は、名称・用途ともに残念ながら不明です。（笑）

花しょうぶ町歩きイベント開催！



二〇一〇年十月二十四日に、彦根市の花しょうぶ通りで町歩きイベントを開催しました。

花しょうぶ通りは伝統ある建物が多く残っており、伝統的建造物保存地区に登録する為の調査を行っています。その魅力を広く紹介しようと開催しました。

当日は生憎の雨に見舞われましたが、学生だけでなく、一般の方十三名にもお集まり頂きました。彦根芹川駅より出発し、久左の辻にある滋賀中央信用金庫銀座支店まで、通りにある八軒の古民家を学生が主体となって説明しながら歩いて回りました。

私たち学生が企画・運営を行い、メンバーで役割分担を行い、メンバー一人一人が責任を持って、このイベントに取り組むことができました。私たち学生にとっても、思い出深いイベントです。



↑
【図面を手に古民家の説明をするメンバー】
参加者のみなさんは説明を聞き、
写真を撮ったりメモを取ったり
されていました。

1 かぼちゃ小屋ができました



とよさだプロジェクトさんからの依頼ではじまった道具小屋づくり。学生がコンペ形式で案を出し、えらばれたのがこのかぼちゃ小屋！豊郷の名産「ぼっちゃんかぼちゃ」をモチーフにしています。今回の道具小屋づくりでとよさださんとの交流が持てたことはもちろん、苦労はたくさんありましたが、新たな技術面や知識面でも多くのことを学ぶことができました。今後この道具小屋が使われ、とよさださんの活動の拠点となれば嬉しいです！

toyosato kaizo project

とよさと快蔵プロジェクトとは？

とよさと快蔵プロジェクトは、2004年に発足し、それ以来昔ながらの風情ある街並みを持つ豊郷町の空き家となっている9件の古民家や蔵を改修・活用してきました。また、改修活動のみならず豊郷町内のお祭りに参加したり、イベントを企画したり、同じフィールドで活動するプロジェクト同士で交流を図ったり・・・。

私達学生が豊郷町にできる「まちづくり」とは何なのかを考え、活動しています。

2 坂でつながる町へ



坂の町尾道。この町で活動しているNPO法人尾道空き家再生プロジェクトさんのもとを訪れ、ワークショップに参加したり、意見交換を行ったりしてきました。デザインや遊び心を忘れない魅力的な改修物件。私たちの活動でも取り入れたいことがたくさんありました。

今年で3年目となるどろんこまつり。今年は子供にたくさん来てほしいという思いから、小学校に広報に行ったり、とっとまつりでワークショップを行ったりしました。当日は子供と学生みんなでどろどろ。快蔵の学生と子どもたちの夏の思い出です。

3 泥だらけになった、夏



4 まちのお宝発掘

もっと豊郷のことを知りたいという気持ちから思い立った合宿+まちあるきワークショップ。2日かけて豊郷町の良いところ、面白いところを探し回りました。見つけた成果はまちあるきマップにまとめて町の人へ発表しました。



5 古民家を楽しもう

とよさと快蔵プロジェクト10件目の改修物件、前田邸。大掃除を終えてようやく改修に着工し、なんとか人が立ち入れる状態になりました。そんな前田邸をどのように活用するか、町内外のいろんな人と考える場として企画したのが「古民家再生塾-前田邸プロジェクト-」(会期は3/5～3/13)。NPO法人とよさとまちづくり委員会さんととよさと快蔵プロジェクトの活動の足跡をパネルとして展示したり、子どもたちとワークショップをしながら遊んだりもしました。改修した後もこんなにいろんな人が来てにぎわうような、そんな場所を目指したいと思います。

2010年度の成果と反省。

今年度は改修作業、イベントの運営・協力に加え、新たに調査・研修をプロジェクトの中心として活動してきました。例年以上に活動の幅を広げた分、問題も増えてきましたが、チームで団結して乗り越えました。

また、研修で他地域の活動を見学するなどで学生みんなが感じたことが、まだまだ豊郷町のことを知らないということ。もっと町のことを知って、もっと町の人と話す。それが、今後の課題です。

2011年3月31日

出前授業 2 年目も順調

菜の花エネルギー



小学校出前授業 二十一年度彦根市立城西小学校を初めて訪問し、今年度で二年目の取り組みとなる。小学生に環境やエネルギーについて興味・関心を持ってもらうことを主な目的としている。地球温暖化やバイオディーゼル燃料、カーボンニュートラルなどについてスライドショーや劇を交えて説明する。また、ベルチェ素子を使った「手のひら発電」により、プロペラの付いたモーターを回す実験も行う。



手のひら発電を楽しく生徒 11 月 29 日、彦根市立城北小学校で

城北小初訪問 合計三回 城西小二回目 の授業

彦根市立城西小学校を 6 月に 2 クラス、城北小学校を 1 月に 1 クラス訪問した。前年度に城西小学校から好評を得られたため、訪問する学校の数を増やした。小学生は 4 年生の 1 学期に電気やモーターについて学習するため、出前授業はこの学年を対象としている。授業の中でバイオディーゼル燃料が菜の花の油から作られることを説明すると、教室からは驚きの声が上がった。また手のひら発電は、手のひらと氷の温度差を使って発電を行うものであり、授業の中で小学生には最も喜ばれる内容である。

小学生からの 評価上々

城西小学校、城北小学校からの感想は次のとおりであった。

「地球温暖化の原因がわかりました。二酸化炭素を出さないようにしようと思います。」

「植物が二酸化炭素を吸収することを初めて知り、バイオディーゼルを使えば二酸化炭素は増えないことがわかりました。」

「劇はおもしろく、とてもわかりやすかった。手のひらで発電ができるなんて不思議だった。」



小学生の前で劇を見せるメンバー 6 月 15 日、彦根市立城西小学校で

菜の花で資源を循環

菜の花エネルギーは資源循環型社会の形成を目標とし、イベントを通して地域の方々に環境やエネルギーについて意識を高めてもらうことを目的としている。今年度で 6 年目の活動となり、菜の花栽培やバイオディーゼル燃料作りは現在も継続されている。最近では小学生を対象とした教育活動にも力を入れている。

BDF カート

小学生にも好評



BDF カートに乗車する小学生 3 月 6 日、びわ湖毎日マラソンで

びわ湖毎日マラソン環境キャンペーンふれあいテント村にブースで出展した。当イベントには多くの地域から来客が訪れたため、より多くの人々に環境やエネルギーについて知ってもらう機会となった。イベントでは手のひら発電の体験のほか、バイオディーゼル燃料 (BDF)

菜種油 搾油量増加



彦根市稲枝町にある休耕田を利用した菜の花栽培は、農家の協力の下 4 年目の収穫を終え、現在 5 年目の栽培に入っている。今年度の菜種油の搾油量は前年度を大きく上回った。

歴代で 2 番目となった。搾油量の増加の理由として、畝の作り方や種の播き方を工夫したことが挙げられる。しかし課題もある。搾油した油の質が悪く、食用として使うことができなかったため、当初予定していた農家の方々との天ぷら会を開催できなかった。湿気による腐食を防ぐため収穫後の菜種の乾燥を早急に行うことや、搾油を専門に扱っている外部に委託することにより改善すべきであると考えられる。

高大連携授業 今年度も万全

例年通り虎姫高校の学生が来校し、エンジン講習および燃料作りの授業を受けた。高校生は自分達で製造したバイオディーゼル燃料を使い、菜の花エネルギーが所有するバイオディーゼルカートに試乗するなど、エネルギーに関する体験をした。また、菜の花エネルギーのメンバーが受験勉強や進路についてアドバイスをするなど、高校生は普段は聞くことのできない話をすることができた。



廃食用油から燃料を作る虎姫高校生 8 月 23、24 日、県立大学で

成果と課題 明らか

今年度の活動では小学校出前授業の訪問学校数を増やし、各校で好評を得た。また出前授業が新聞に取材されるなど成果は多かった。来年度以降も小学生の目線に合わせ、授業の改善を続けていけば、先方からの評価も上がり、地域の環境意識の向上に大きく貢献することができるだろう。一方継続年数が長い休耕田での菜の花栽培では、菜種油は搾油されたが、油は活用されないまま終わってしまった。農家の方々と協力し、栽培活動を行うことには大変意義があるが、活動の目的が不十分である点は否めない。継続されているだけの恒例行事とせず、まずは活動の目的をはっきりさせることが必要である。また滋大祭での燃料作りはチーム初の試みであったが、来客が少なく、宣伝不足が課題として挙げられる。来年度以降の継続は未定であるが、継続する場合は滋賀エコプロジェクトとの事前の打ち合わせを十分に行うと上で開催する必要がある。

滋大祭で 燃料作り

他大学で初の試み

滋賀大学経済学部で学園祭「滋大祭」でバイオディーゼル燃料の手作り体験を行った。当イベントは滋賀大学で環境活動を行うサークル「滋賀エコプロジェクト」の協力の下で実施された。BDF は近年利用が広まりつつある石油代替燃料であり、エネルギーを身近に感じることのできる体験活動となった。



滋大祭で燃料作りを体験する来客 11 月 7 日、滋賀大学で

一姓

地域のお年寄りと学生をつなげお年寄りに元気になつてもらいたい！
州区の人々だけでなく外部の人々が交流できる場を提供したい！
地域の子供たちに農業の楽しさ・素晴らしさを伝えたい！
畑に作物だけでなく人との出会いの花を咲かせたい！



一姓とは？

野菜作りに興味があつたけど場所がなくて作れなかった、土いじりが好き！、自分で作った野菜を食べたい！、様々な人と交流したい！、そんな学生が集まつた団体である。学生がプチ農業体験を行い、農業の大変さを体験することで、野菜の大切さ、食の重要性、農業の必要性を学んでいる。

一姓は、開出今集落の「一姓畑」に拠点を置いて活動している。学生が地域に入つて畑作りをすることで、周囲の地域の方々に元気になつてもらい、一緒になつて野菜作りをすることで学生のパワーアップを目指している。また、一姓畑の周囲で、畑作りをされているお年寄り、集落の若い世代を畑でつなげる仲介役となり、地域を活性化する仲介役となることを将来像とする。そして、一姓に興味のある他大

琵琶湖毎日マラソンに出店！

地産地消をアピール

2011年3月6日(日)に、皇子山陸上競技場で開催された琵琶湖毎日マラソンに、一姓はブースを出店した。一姓の活動を知ってもらおう事、地元野菜の味を知ってもらう事を目的とし、豚汁を販売した。

豚汁には、一姓畑で収穫した大根、師匠（一姓畑の周囲で野菜作りをされているお年寄りある。）にもらつた大根・白菜・しめじ、彦根の直売所で入手した人参、稲枝味噌を使用した。

具だくさんの豚汁は、お客さんに大盛況。130食分の豚汁は午前11時に販売開始し、午後2時には完売した。また、一姓のアピールも兼ねたパンフレットに、水菜・バジル・ローズマリーの種を、おまけとして付け、播き時を記入する、という工夫を凝らし配布した。少しでも多くの人に、農に触れる機会を与えたい！という趣旨がこの工夫には詰まつている。

ブース出店は、環境キャンペーンのイベントでもあつた。一姓では、販売における器や箸のごみを出さないように、大学の生協で借りたものを使用した結果、多くの人々に環境保護のアピールが出来た。そして、湖風祭同様のデポジット制を使用することで、確実に返却をして頂くことも可能にした。

このように、外部との交流をする機会に参加することで、一姓の活動アピールを行う事が出来た。そして、他のブースを出店されていた団体さんと交流することで、互いに良い刺激を与えあうことが出来たと感じた。今年度は、一姓のチームの基盤作りを主としたため、内部での活動が多く、外部と交流する機会が少なかつた。そのため、このイベントへの参加は、外部への一姓の発信、地産地消を促す良い機会になつたと言える。



プロジェクト白慢

野菜作りを通して：

***地域の住民との関わり**

小さな範囲の中での交流ではあるが、近所の住民と密に関わることが出来る。

***食の重要性**

猛暑による夏の不作、大寒波による冬の不作によつて野菜を作ることを大変さ・難しさ、食の有難さを実感できる。

***チーム力の大切さ**

一人ではなかなか進まない作業でも、仲間がいることで作業の進み方が変わり、チーム活動の意味も学ぶことが出来る。

後期の活動

前期の反省を生かしたグループ作業を火曜日と金曜日に分かれて行つた。この結果、個人でしていた時よりも作業に身が入つた。しかしながら、大寒波の影響で野菜の生育が悪く、作業が出来ない日が多くなり、土づくりもなかなか進まなかつた。春に向かうに連れて土壌改良を中心に作業を進めているので、夏野菜は生育が良くなつていくと思われる。

また、近江楽座のチームとよさらださんと協同で県大敷地内の放棄地を開墾して利用する、というプロジェクトを実施する、といった活動も行つており、一姓と外部の方々との交流の場として提供することを期待している。

元声の地

●若い世代が畑作りを地域に入つてしてくれることで、新たな生きがいが出来た。

●地域の子供達にとつて、サツマイモ掘りはとても、良い経験になつた。また、このようなイベントを行つてもらいたい。

●新しい土地で畑をしてくれるのが楽しみだ。また、様子を見に来たい。

一年間のまとめ

成果

今年度の成果は、二つある。まず、組織作りが完成したことである。十二名のメンバーが、今年度のイベントにほぼ出席し、一姓畑での作業を共にする中で、チームワークを向上させていった。メンバー一人一人が、野菜作りの楽しさ・難しさを実感し、地域の人々と交流する中で、成し得た成果だと言える。

次に、地域の人との関わりを定着させたことである。畑作業に何度も通うことで、畑のアドバイスを頂いたり、近所で作つておられる野菜を頂いたり、時には近所の方が苗を植えてくださつていたり：近所の住民と密に関わることが出来ている。

このように、人とのつながりを保つことが出来たのは、地域の方々の温かい支援の上で成り立っている、と感じている。今後も、このつながりを維持し、新たなつながりを広げていきたいと思う。

課題

イベントに関しては、十一月に行つた開出今集落の子供たちとのイモ掘りイベントは一年間を通したイベントにし、もつと地域に介入していくべきであつた。今年は、チームの基盤作りに重点を置いたために出来なかつた、外部の人々との交流は来年度、一姓畑においてイベントを計画し、実施したい。野菜作りに関しては、基盤となる土づくりをしつかりすること、手入れを細かく行う事が課題として残つた。夏場の雑草や害虫対策や、冬場の寒さ対策を主として、来年度改善していきたい。また、メンバー全員で野菜作りの知識を共有することで、自分達で作つた野菜を販売出来る段階まで、野菜の出来を良くしていきたい。



昨年度末に地域の方から情報をいただいて以来、「何とか利用させていただけないか」と活動を進め、様々な人の協力のもとついに「八百秀アパート」の一室を利用させていただけることになりました。

平成22年度は上半期に清掃・改修を進め、下半期では月に数回の頻度で、学生のみで木工や MT を行なっていました。今後は古本屋などを経営し、活動にかかるランニングコストをまかなっていけないか検討をしていきます。

01 ▶Big News 念願の活動拠点「八百秀アパート」。

色人図鑑プロジェクト

色人図鑑プロジェクトでは、多賀町に住む様々な働く方たちにインタビューし、その内容を記事にして発行するプロジェクトです。平成22年度は、Taga-Town-Project が発足時からお世話になっている設計事務所「A-SITE」の平居晋さん、子育てサークル「パオパオ」の宮野由紀絵さん（右写真）と、酒屋「大津屋」を営み、かつ多賀町議会議員でもある本多重男さんの3人にインタビューし、記事を作成しました（本多さん分は平成22年度3月現在作成中）。

八百秀アパートプロジェクト

八百秀アパートプロジェクトは、古い鉄筋コンクリート造のアパートを、活動の拠点とすべく改修し、運営していくプロジェクトです。今年度は、清掃・机や椅子の搬入・壁の塗装・天井の塗装・床の改修・食器棚制作を行ないました。右写真は、構造用合板を床下地材に打ち付けている場面です。

平成22年度現在では、主に MT（メンバー同士の定例 MT や、渉外の打ち合わせ場所）として機能しています。今後は、トイレ等快適に利用するための改修を進めていこうと考えています。

さらに古本屋の運営を行ってランニングコスト等をまかない、より人が集まり交流できる場所として機能させることを考えています。

もんぜん亭サイン計画

もんぜん亭サインプロジェクトは、多賀町のコミュニティ施設のひとつである「もんぜん亭」に、施設の今月のイベントなどさまざまな情報を掲示する看板を制作したプロジェクトです。低予算であったため、材料には、滋賀県立大学で実験に使用した後の木材を利用し、作成しました。

この他にも、多賀のマスコットキャラクターである「多賀ゆいちゃん」のフィギュア作りのプロジェクトにも取り組み、ものづくりを通して様々な人との関係をつくることができました。

02 ▶プロジェクト紹介 平成22年度の活動内容



Taga-Town-Project

活動報告 ニューズ ペーパー

03 ▶ちょっときいてよ！プロジェクト自慢 1回生がプロジェクト回してます。

平成22年度は、八百秀アパートプロジェクトと色人図鑑プロジェクトを軸として、大小様々なプロジェクトを進めましたが、半数近くのプロジェクトを1回生が担当しました。特に、八百秀アパートプロジェクトにおいては、渉外・設計・予算執行・作業準備等、ほとんどのプロセスを一回生が担当して進めました。

プロジェクトを担当した学生は、責任・積極性・主体性の意識が高くもつことができます。一回生のうちから何らかの形でプロジェクトを担当し、意識を高く持つ学生が多く所属することは、Taga-Town-Project の自慢です。

今年度は色人図鑑プロジェクトで、様々な人にインタビューをする機会をいただきました。その中でも、特に活動について多くのコメントをいただいたのは、設計事務所をされている平居晋さんです。

そこで「多賀博物館におもしろい人がいる」「もっと多賀に來い！」「まじめすぎんねん！」等々、ラフな話口ですが今後の活動の展開につながる話や、活動の問題の本質をつく話を多くしていただきました。実際、今年度の活動の軸のひとつであった「八百秀アパート」のお話も平居さんのインタビューがきっかけになったものです。

04 ▶地元の声 「まじめすぎんねん！」

1年間の反省として、1. スケジュールの遅延、2. 理念が共有できていない、の2点が挙げられます。「1. スケジュールの遅延」は計画性の欠如と、モチベーションの低下に由来します。計画性は、経験の問題であるので、今後はより円滑に進めることが出来ます。問題は、モチベーションの低下、具体的には「何のためにこれをやるのかを見失う」ということです。これは「2. 理念が共有できていない」にもつながるのですが、「何のためにやるのか」は無いわけではなくプロジェクトとしては実は初めから設定されており、途中で忘れてしまうことが多いのです。「2. 理念の共有ができていない」、つまり理念を忘れてしまうという問題は、今後解決すべき大きな課題です。

1回生が事務的な手続きも含め、活動を担えることになったことは大きな成果として挙げられます。過去の活動では、どうしても引継ぎがうまくいかず、いざ代替わりしてもどうすればいいかわからないことが多かったからです。

05 ▶1年間の活動を通した課題と成果 情報を共有し続けること。



豊郷町主催のイベントに参加させていただき野菜を販売、せめていただいたり、豊郷町で行うイベンのスタツフとして呼び掛けてくださったり、今年は豊郷町の方々と関わる機会をたくさんいただきました。さらにとよさらだの活動を応援してくださる方や、若者が豊郷で活動していることを歓迎してくださっている方がたくさんおられます。

彦根市の朝市において、とよさらだが行えるよい野菜販売イッスしてくださる方々や、毎回買いに来る方々、とよさらだの元の方々に知つていただけているかと思ひます。これからは、もう少し地域にはいっていただければいいなと思ひます。



ビッグニュース もくれん規約 作成！

滋賀県立大学木工所（もくれん）の管理について

昨今、滋賀県立大学木工所（以下もくれん）の使用の仕方、管理について、不明瞭な部分が多いので、今後のもくれん使用について、エコキャンパス木楽部会、顧問の松岡拓公教授が規約を設けて頂きます。

<規約>

1. もくれんを使用する場合は、必ず本署代表者、松岡教授に事前連絡をすること。
事前連絡をとった上で、下の欄に名前、連絡先、日付、時間を明記し、本署代表者の一通まで印をもらっていくこと。
上記が守られていない場合、その日のもくれん使用禁止、また今後の使用禁止になり得る。
本署代表：一浦 皓治 kajin@unishib.ac.jp
担当顧問：松岡拓公教授 mitsukoshi@unishib.ac.jp
2. もくれんを使用した場合は、使用した機材は元の場所に片付け、出たゴミは持ち帰ること。
3. 使用時に大きな音を出す機材を使用する作業は午後の時とする。（もくれん内、付近で）
4. もくれん内の機材を持ち出したい場合は、何卒、いつ借りたのかを本署代表者に伝える。許可をもらうこと。
5. もくれんの鍵は、図書グループ管理課の奥武さん、松岡教授、本署代表者が1キーずつ持ち、他者が持つことを禁じる。
6. もくれん使用に発生した借費等は、必ず本署代表者、松岡教授に連絡すること。
7. もくれん内蔵、またはもくれん付近での火気は厳禁とする。
8. もくれんを倉庫代わりに使用しないこと。
許可なしに置いてあるもの（木材、その他、椅子など片断であったとしても）は、こちらの判断で処分します。必ず許可を取ってください。
9. 印刷がない場合、鍵は借りられません。

以上の事項を守らない方は、使用を禁止させていただきます。
エコキャンパス木楽部会
顧問：松岡拓公雄

印

団体名 _____ 月 _____ 日 _____ 時間 _____

担当者名 _____ 連絡先 _____

城西小学校での

地域の声

写真立てワークショップ☆

滋賀県立大学環境科学部
生物資源管理学科の須戸
教授がPTAの一員として
城西小学校のふれあい祭
りというイベントのスタ
ッフをされていた。須戸
教授の紹介で、木工の

ワークショップを開催
する事に。木を使った
写真立て作りに挑戦し
てもらった。普段できな
い様な工作ができたど、
多くの子どもたちに楽
しんでもらえた。

本年度、木楽部会の活動
ではない活動団体があもく
れんを使用している最中
に、機械の刃が欠けて怪
我をする事故が起きた。
正しい使い方をせずに、
手袋等の安全対策を怠っ
ていた事が原因だった。
この事故をきっかけにし
て、管理者である木楽部
会と、顧問の松岡教授と
で話し合い、正式にもく
れんの使用規約を作成す
る事に決めた。昨年の一
月から作成にとりかかり
今年の1月に完成した。
しかし、未だ公布には至
っていない。今後、公布
して執行していく予定で
ある。

工房見学に行きました♪

*ちよっときいてよ！
プロジェクト自慢*



右の写真は、岐阜県の
飛騨高山で行っていた
「飛騨の木工房めぐり」
イベントに乗じて、
kino workshopとい
う工房を見学させて頂
いた際の、様子である。

工房の運営者でもあり
職人でもある、ご夫婦
に、作品を見せて頂き
お話を伺った。職人の
技術に触れ、様々な作
品を見る事は、部員の
良い刺激となった。

1年間を通して・・・

課題と成果

◇良かった点

- ・制作を依頼してきて下さった方と一緒に話し合
ってどういう物
にしたいのかな
ど決めていく事
が出来た。

- ・制作活動において、計画では年内完成予定だったが、メンバーの予定や、機械を揃える事が出来ず完成に至らなかった。

◆反省点

- ・制作活動において、計画では年内完成予定だったが、メンバーの予定や、機械を揃える事が出来ず完成に至らなかった。

製作
おままごとキッチン
ベンチ

技術・知識向上
造形活動
工場見学

ワークショップ
城西小学校
クラフトキッズ

これら3つの活動を柱にして、同時並行で進めてきた

プロジェクト紹介

木楽部会

左の写真は、昨年の8
月、大阪府にある
木の工房 www.kino-workshop.com さん
に工房見学としてお邪魔
させて頂いた際の様
子である。そこでは、
木に関する知識から、
工法まで、丁寧に教え
て頂いた。新入生も参
加し、とても有意義な
勉強会にもなった。



私たちエコキャンパス
プロジェクト木楽部会
では、循環型社会形成
の一助となり得る活動
として、自然素材を使
ったものづくりを広め
る団体である。ものづ
くりを体験する事で物
を大切に使う精神が芽
生えたと考えている。
今後の展望としては規
模の縮小も考慮にいれ、
部員のキャパシティ
とバランスを見ながら、
今後の仕事量の調整を
考えている。

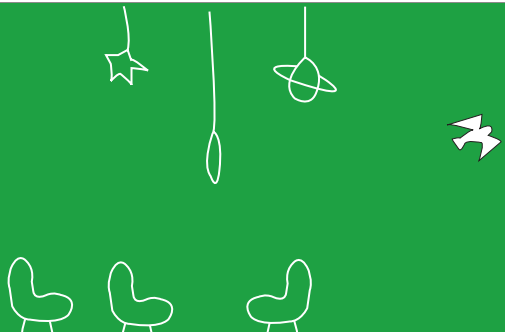
発行日：2011年3月31日

発行者：エコキャンパスプロジェクト木楽部会

エコキャンパスプロジェクト木楽部会

代表：一浦皓治郎 副代表：酒井麻南（所属：環境建築デザイン学科）

顧問：松岡拓公雄 山根周



キャンドルナイトで子どもたちに感動を

あかりんちゅ × 滋賀県立小児保健医療センター（守山市）



▲中庭に出てキャンドルの光を見つめる子どもたちや看護師らとあかりんちゅ

今年のあかりんちゅのビッグニュース！それは1月27日に守山市にある滋賀県立小児保健医療センターで企画した中庭でのキャンドルナイトである。看護師さんからの、普段院内から外出することのできない環境にいる子どもたちにも、キャンドルナイトを見てもらうことで喜びを感じたり、楽しいひと時を過ごしてもらいたいという思いのこもった依頼を受け、小児病院でのキャンドルナイト企画が始まった。

当日、室内ではあかりんちゅの新プロジェクトである「灯り×音楽」という、キャンドルの温かな視覚効果とともに聴覚からの癒し効果も合わせて届けるためにスタートさせた、メンバーによるハンドベル演奏も行った。目の前



あかりんちゅ～しん

2011年（平成23年）
3月31日
木曜日

いままで
と
これから

1年の活動を通じた成果と課題

あかりんちゅの

今年度は活動開始2年目ということもあり、新たなことに挑戦した1年であった。キャンドルナイトにおいては、キャンドルナイトのみを提供するのではなく、「灯り×音楽」という今までとは違った付加価値をキャンドルナイトに付け、「手作りの灯りと手作りの音楽で過ごす夜」というものを見に来られたお客さんに提供してきた。ただ、ハンドベルの練習時間がなかなか取れなかったために、キャンドルナイトの場でハンドベルを提供する機会があまり取れなかったことが一つの反省点である。

また今年度は、新メンバーが数人入ってきたことにより、昨年度とは違ったメンバー構成となったが、ミーティングの回数自体が少なかったこと、また全員がそろったことがほとんどなかったことも反省点の一つである。キャンドル作り教室は、開催場所を新たに募集しなかったこともあり、昨年度と同じイベントで主に実施した。

今年度は、メディアに注目して頂く機会が多く、それがきっかけで繋がりが広がっていった。今後もメディアをうまく利用して、活動の範囲を広げていく。

来年度はあかりんちゅの原点である「キャンドルナイト」を活動の中心に置き、より地域に密着した形でのイベントを目指す。また定期開催を目標とし、地域あるいはカフェ等と協働してイベントを行っていく。その中で「残蠟からのリサイクル」という部分をもっと分かりやすく伝えるよう、ハンドベルを合わせたキャンドルナイトの展開を図っていく。



▲あかりんちゅのメンバー

What's
あかりんちゅ？

あかりんちゅは、お寺やホテル等からいただいた残蠟を再利用してキャンドルを作り、キャンドルナイトイベントやキャンドル販売、子ども向けのキャンドル作り教室を行っている。活動のきっかけは、2008年11月に

われた彦根キャンドルナイトイベントだ。あかりんちゅの立ち上げメンバーは、ボランティアスタッフとしてこのイベントに参加し、スローな夜をテーマとした彦根キャンドルナイトをとっても綺麗なイベントとして成功させることができた。しかし、それと同時にある疑問も浮かんだ。中国製の輸入キャンドルを使用し、大量のCO2を排出してしまうこのイベントが果たして本当にスローだろうか。私たちの手でもっと環境負荷を抑えたイベントにできないだろうか？

そんな時、お寺では最後まで使い切れずに捨てられてしまう残蠟がたくさんあるという話が舞い込んできた。あかりんちゅはこれらの残蠟を再利用することに着目し、資源を有効活用するよりエコなイベントにしていこうと考え、活動がスタートした。

現在メンバーは12人。全員が女の子で、新メンバーも加わった。立ち上げメンバーが築いてきたものを引き継ぎ、また、新たな風も吹きこんでいこうという想いで活動している。

あかりんちゅの

ここが自慢！！

1月23日、滋賀県立大学の卒業生から依頼により、東京で開催された「防災とボランティアの集い」にて、あかりんちゅがキャンドルセンモニを実施。滋賀県外でのキャンドルナイトはこれが初めて。活動の場は広がるばかりだ。

あかりんちゅ
東京進出！！

女性モニター募集！！

GREEN CANDLE HIKONE JAPAN acarinchu HAND MADE RECYCLED PRODUCTS

あかりんちゅ × 環境省 × NPO法人五環生活

良い仕事をしてくれました。また機会があれば一緒に仕事をしましょう。ありがとう！！
(キャンドルナイトの依頼者)

また来年も来てねー！！
(キャンドル教室に参加した女の子)

良い活動をされていると思うので、これからも頑張ってください。
(カフェの店長へのヒアリングから)

声の地域

リユース出来るくらいの大きい残蠟はそのままキャンドルナイトで使用した方がより環境への負担が減らせるのでは？
(NPO法人五環生活の関係者)

キャンドルの灯りとハンドベルの音色が綺麗でした。
(キャンドルナイト@守山のお客さん)

リサイクルを押すようなキャンドルであればパッケージにもリサイクルの要素を取り入れる等してこだわってみては？
(ヒアリングの声)

全国ネットTV番組“朝ズバッ！”であかりんちゅの紹介

昨年の12月20日に、あかりんちゅの活動が紹介されるとい貴重な経験をされた。朝ズバッ！のディレクターさんが京都新聞さんに取り上げて頂いた記事を見て興味を持ってくださった。そこからのご縁が番組での紹介に繋がって、あかりんちゅにとっては驚きと喜びの瞬間になったと同時に、チームとして今後の活動をより一層拡大していこうと改めて身を引き締めるきっかけとなった。

BIG NEWS!

食育推進隊、新聞に載る

昨年6月19日（土）、ひこね食育推進委員会が主催する「ひこね食育フェア」に参加した時の活動の様子が翌日の中日新聞に掲載された。「ひこね食育フェア」では、地域住民129名の骨密度測定、栄養相談、びわこ牛乳の提供、骨粗鬆症とカルシウムに関するパネル展示、カルシウム豊富なレシピの紹介を行った。骨密度の測定には、開始と同時に長い行列ができ、地域住民の健康に対する意識の高さが感じられた。



活動奨励賞を受賞

昨年12月11日（土）、「環びわ湖大学地域交流フェスタ2010」に参加した。滋賀県内に立地する大学の様々なプロジェクトが各自の活動発表するなか、本プロジェクトはポスター部門で活動奨励賞を受賞した。



2011年（平成23年）3月31日（木曜日）
発行：県大地域食育推進隊
Shiga 食育推進プロジェクト

Shiga 食育推進プロジェクトとは？

県大地域食育推進隊「Shiga 食育推進プロジェクト」は、滋賀県立大学の生活栄養学科と生活デザイン学科の学生が中心となり、今年たちあげたプロジェクトである。生活栄養学科は大学で学んだことを生かして食育の実施、各団体が実施する食育事業に参加・支援を行い、生活デザイン学科は食育事業においてトータルなデザインサポートを行うことで魅力的な空間づくり、食育をより効果的に行うことのできるツール等を制作する。行政、地域の各種団体、大学が連携した食育推進活動を様々な方法で行い、学生が主体となったこのような組織的なプロジェクトが全国の地域食育推進モデルとなることを目指す。



プロジェクトのロゴマーク決定

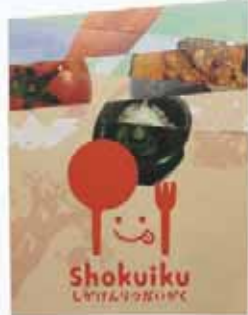
「食育」とは、食に関する正しい知識を習得し、それを実践する力を身につけることである。本プロジェクトの「食育」という活動テーマから、「スプーン」と「フォーク」、「こはん」を食べて笑顔になるシーン」をロゴマークに表現した。ロゴマークはプロジェクトのシンボルとしてエプロンやネームカード等のツールに入れたり、イベント会場のサインや物事をわかりやすく伝えるアイコン、小見出し記号としても使用していく。



■クリスマスパーティー ネームカード



■ロゴマーク入りのエプロン



■活動紹介リーフレット

nakaniwa cafe

滋賀県立大学生活協同組合、栄養士会と連携し、本学学生に対する食育活動を昨年の7月に2日間、11月1日実施した。骨密度測定（7月234名、11月80名測定）、体組成測定、栄養士による食生活相談などを行ったところ、友達同士の参加やリピーターも多く、栄養士さんの話を真剣に聞く学生の様子が見られた。



お箸を正しく持とう！



昨年6、7月、彦根市内の小学校1校においてお箸の持ち方についての調査を実施した。

ちょっと聞いてよ！プロジェクト自慢

今年度は、さまざまな団体と連携して数多くの食育推進活動を行うことができた。

5ADAY スーパーマーケット



昨年9、10月、（株）平和堂、5ADAY協会と連携し、彦根市内の保育園と小学校で食育の授業を実施した。5ADAYについての学習、野菜のお買い物体験ゲーム等を行った。

元気フェスタ 2010



昨年10月11日（月）、彦根市教育委員会保健体育科、福祉保健部健康推進課が実行委員として主催する「元気フェスタ2010」に参加した。地産地消推進活動として滋賀県産の食材を使用した炊き込みご飯を作り、レシピをつけて模擬店で販売したところ、1時間もちたないうちに、用意した140食が完売するほど好評だった。

『旬』を満喫！！白菜収穫体験&親子料理教室

昨年12月11日（土）、（株）平和堂、（株）宝酒造、ひこね食育推進委員会と連携し、親子を対象に、白菜の収穫体験、料理教室等を行った。本プロジェクト考案の「野菜の名前を当てる食育ゲーム」と「6つの基礎食料品の説明」も行い、大学での学びの成果を発揮した。



クリスマスパーティー



昨年12月18日（土）、彦根市教育委員会の後援のもと、彦根市内の特別支援学校児童を対象にして調理実習（ブッシュドノエルとロールサンド）を行った。プログラムの企画から媒体の作成まで自分たちで行い、当日は子供たちが楽しそうに調理する様子が見られた。

地域の声

- ・学生さんが親切で親しみやすく、感じよかった。骨密度の説明もわかりやすく、詳しいので大変役に立った。（ひこね食育フェアにて）
- ・学生さんのおかげで食育ができた。来年もまた来てほしい。（5ADAYスーパーマーケット食育体験にて）
- ・子供が楽しそうに作る姿を見ることができてよかった。（クリスマスパーティーにて）

一年間の活動の成果と課題

今年度は様々な食育事業に参加し、プロジェクトのシンボルであるロゴ、エプロンも完成した。来年度以降も継続して活動を行い、より効果的な食育を行うことができるようツール作りやメンバーのスキルアップを行っていく。積極的に食育事業に参加することで、プロジェクトの活動や各団体同士の連携強化を支援し、食育事業活性化に貢献していきたい。

■プロジェクト紹介 ～"荒神山ロックフェス"とは?～

荒神山ロックフェス(KJRF)は、滋賀県立大学を会場として毎年開催されている学生主体の音楽イベントです。2002年、滋賀県彦根市の滋賀県立大学の有志の学生によって創始されました。当初から続いている「企画・運営を学生だけで行う」とスタンスを守りつつ、地域の皆様や出演者の方々の協力を得て様々な変化・成長を遂げてきました。今年で9回目の開催となった荒神山ロックフェスは、スローガンを「飛躍」とし、更なる進化をすべく来場者・出演者・スタッフが一体となって、心から音楽を楽しめる空間をつくることを目指しました。「学生」という枠組みにとらわれず、より多くの人にこのフェスに関わってもらいたい—それが我々の願いです。本年度は8月21・22日に開催されました。

■チームのビッグニュース

KJRF 2011 の開催が決定しました！新しい委員長も決まり、既にプロジェクトは始動しています。来年度のKJRF に是非ご期待下さい！

■ちょっと聞いてよ！プロジェクト自慢

【すべて学生の手で！】

企画・運営はもちろんのこと、広報活動、ステージ・会場設営や音響・照明まですべてが学生スタッフの手で行われます。

しかし侮るなかれ、そのクオリティは本物の夏フェスさながら！

＜ステージ設営の様子（8/12～）＞



ステージ部材を借用



■地域(来場者)の声

- ・学生だけでこれほどのイベントを作るのは本当に感心した。
- ・毎年来ているが、今年は例年以上のエネルギーを感じることができた。
- ・スタッフが生き生きしていた。

【地域貢献への取り組み】

我々は毎年地域貢献にも毎年力を注いでいます。

- ・彦根市内の清掃活動（下写真参照）
- ・地元のお祭り・イベントなどのボランティア
- ・地元団体(高藤組・多賀町「芸や」さん)とのつながり



【地域に根付いた音楽イベントへ】

「県立大学の学生が何かおもしろいことをやっている」と地域の方に認識してもらい、巻き込んでいく。

学生と地域の相互関係

支援・関わり合い

地域に活気がある要因となりうる。

【当日の様子 8/21(土)・22(日)】

ここで、今年行われたKJRF2010の様子を写真でほんの少しだけ紹介します◎



左：広報活動のお陰か当日は例年を遥かに超える多くの人で賑わった。

中央左：会場内には模擬店やフリマもあり家族連れも多い。

中央右：今年の公式Tシャツ。

右：出演者も気持ちよさそう。今年は遠方からの参加も多かった。

■1年間を通じた成果と課題

本年度まずフェスそのものの質の向上を図りました。学生イベントであるが故の“クオリティの至らなさ”や、それにありがちな“内輪だけの盛り上がり”というイメージを払拭しようと細部にまで気を配りました。さらに本年度は広報活動に力を入れ、その結果、応募バンド数も例年より大幅に増加し、当日の集客も例年より格段に増えました。そういった面から見て今年は大きな「飛躍」の年であったと言えます。

来年度以降の課題として挙げられるのは、「サークル活動との線引き」です。KJRFは昨年度までは、県立大学の音楽会のイベントという位置づけであった為、今年度に至ってもそのイメージは拭いきれませんでした。来年度以降、このイベントを近江楽座のプロジェクトとして継続していくためには、単なるサークル活動の範囲で終わらないイベント作りをしていく必要があると感じました。

さて、今年の荒神山ロックフェスはすでに終了し大成功を収めました。文字通り「飛躍」の年となったと自負しています。来年以降の「飛躍」に大きく期待します。荒神山ロックフェスは毎年このイベントに関わる人たちの強い思いが溢れているイベントです。こんな素晴らしいイベントを1人でも多くの方に知ってもらいたい、そう願ってやみません。

2011.3.31

みかん通信



2011年（平成23年）
3月31日
木曜日

2010年度の未来看護塾ニュース！

イベント

★ ★ ★
盛りだくさん

今年度、新しく参加させて頂いた活動が増えました。

まず、6月に行われた湖風夏祭へのブースの出店です。子どもたちが遊ぶ場を増やしてほしいという地域の人の意見があったということを受け、また多くの1回生が新しく未来看護塾に入ってくれ活動を増やしていきたいという思いもあったことから今回の出店となりました。多くの子どもたちが遊びに来てくれ、とても充実したものとなりました。新しく入った1回生に未来看護塾の活動の楽しさを感じてもらう機会になり、また3回生からのアドバイスを受けながら2回生を中心とし活動に取り組んだことで仕事の受け継ぎもスムーズに行うことができました。

他にも視覚障がい者の野球を体験するという活動も行いました。ハンドボールくらいのボールを転がし、それ

をバットで打つというものでソフトボールのルールに似ていました。ボールの転がるわずかな音だけでボールをキャッチしたり、打ったりしているのを見て、目が見えていないとは思えないプレーをみなさん行われていました。目が見える状態で試合に参加させて頂きましたが、視覚障がい者の方たちには全く及びませんでした。視野を狭くするゴーグルをつけ、バッターに挑戦しましたがボールが見えづらくとても難しかったです。実際に体験してみても、視覚障がい者の方たちのすごさを実感しました。

地域の人たちとの交流が増え、役に立っているような、また私たち自身、新たな体験を通して多くのことを学んでいける未来看護塾の活動をこれからも広げていきたいと思えます。

今年度のまとめ

私たち未来看護塾は、3回生の前期までの2年半の間しか活動できません。1回生で活動内容を覚え、2回生では中心になって活動し、3回生で次の代に引き継ぎをします。2回生でチームを引っ張って活動する中でようやく掴めた頃になって、引き継ぐことになりました。そのため、引き継ぎが十分にできなかったというのが現状となっていました。言葉での説明だけでなく、データや活動について記録していたノートなどを渡し、1つ1つ説明していくこ

とが大切だと感じます。十分に引き継いでいたものの中に「みかん通信」があります。これは、メンバーがそれぞれ活動したことで得た学びを共有するための情報交換の一つとなっています。今年度は、このみかん通信の発行を再

開いていこうということに話し合い、実行できるように心がけてきました。これは、月に1回行われるミーティングの時に配布されます。学んだ事柄や反省点を挙げてそれを共有することによって、次に繋げていけるようになっています。それと同時に

にブログも更新していて、地域の方や卒業生などにも見てもらえるようになり、より広く活動の内容が知ってもらえるようになりました。また、昨年度始まった城南小学校での学童保育ですが、10月ごろから一時休止状態になっていました。学童保育のスタッフさんの方針とあわなところがあったためです。これから、話し合いの場を設け、きちんと方向性を決めた上で参加させていただけようように努力していきたいと考えています。



彦根市立病院でのクリスマス会の様子



「ぼぼハウス」の子どもたちとカレーづくりをしています

未来看護塾はこんな活動をしています！



湖風祭で「ぼぼハウス」の子どもたちと遊んでいる様子

プロジェクト紹介

私たち未来看護塾は、現在約50人の人間看護学部生で構成されており、地域で生活する人々や、医療現場や地域で働く看護職、ボランティアの方々との活動や交流を通して『未来の看護のあり方』について考えることを目的として活動しています。通常の活動として、彦根市立病院の小児科病棟・緩和ケア病棟、NPO

法人ぼぼハウス、彦根市立城南小学校学童保育での活動を行っています。彦根市立病院の小児科病棟では、入院している子どもたちとの遊びを通して発達段階に応じた関わりを学び、緩和ケア病棟では、ターミナル期にある患者さんへのティ―サービスを通して、その時期にある患者さんの理解に努めコミュニケーションの仕方について学んでいます。ぼぼハウスでは、障がいをもつ子ども・高齢者・家族の方々と接する機会が持てます。特に今年度は、障がいをもつ子どもを対象とした『クッキング講座が複数行われ、そこに参加させていただくことで障がいをもつ人々が自立していく過程やその自立

支援について学んできました。そして、この他の活動内容として、毎年秋の湖風祭で親子を対象として開催しているすじつこな場があります。今年度は湖風夏祭や毎日マラソン大会などでも多く開催しました。すじつこな場では、3歳くらいの子から小学校高学年の子まで様々な性別や発達段階によつての遊びに興味を持つか、どのような反応を示すかなど、様々なことを学んでいます。また、今年も彦根市立病院の小児科病棟でクリスマス会をしました。これは、生き生き支援活動の一環として毎年行っています。小児科病棟だけでなく、他の科の患者さんやスタッフの皆さんに参加していただけました。

ちよつときいてます！
わたしたちの活動じまん

やクッキング講座を通して、その子の持っている力が最大限に発揮されるようサポートをしたり、障がいを持っていてもみんなと何も変わらない、楽しみはいっぱいあるよというのを感じてもらえるよう接しています。活動を重ねるうちに、名前を覚えてくれたり、自分から話しかけてきてくれたり、子どもたちとの距離が縮まったと感じられるようになりました。はじめのうちは障がいをもつ子どもたちにとどのようにつなげていけたらいいのかなど、活動を重ねるうちに、名前を覚えてくれたり、自分から話しかけてきてくれたり、子どもたちとの距離が縮まったと感じられるようになりました。はじめのうちは障がいをもつ子どもたちにとどのようにつなげていけたらいいのかなど、活動を重ねるうちに、名前を覚えてくれたり、自分から話しかけてきてくれたり、子どもたちとの距離が縮まったと感じられるようになりました。

地域のこえ

私たちは、日ごろお世話になっているNPO法人ぼぼハウスの福井久美子さんにお話を伺ってきました。ぼぼハウスには長くお世話になっていて、私たちは放課後の時間で児童デイサービスの「ぼぼハウス」や「はばたき」に行き、障がいをもつ子どもたちと交流をさせてもらっています。今年度は、その子供たちと様々な料理を作るクッキング講座が多く行われました。そこに参加することでより仲良くなることのできたことや、子どもたちの成長の場に少しでも多く携われたことを嬉しく思っています。そんなぼぼハウスの施設長の福井さんは、私たち未来看護塾のメンバーをこんな風に思ってくれていました。「ぼぼハウスは、年齢も障がいの有無も

関係なくさまざまな条件の人たちがふれあいを持てるようにしている団体なので、その中で学生という立場の人に関わってもらっているのは、とても良いことだと思っています。子どもたちも私たちスタッフには見せない顔や態度を皆さんには見せることがあるなあと感じています。皆さんとの方が年齢が近いからね。それにきつと同じ時間を過ごしていく中で子どもたち自身も自分の成長に関わってくれている人という風な意識が出ていると思いますよ。それはすごく大切なことだと思います。」また、これからの私たちにとって、こんなことを期待するかと伺ったところ、「看護の勉強をしている皆さんは、必ずと言っていいほど人と関わる仕事に就くでしょう。その時にここで経験したことを生かしてもらいたいです。今、意識的に関わることでコミュニケーションの力を上手に身につけていると思うし、その経験が将来につながっていくツールみたいなになればと思っています。」私たちは本当にさまざまな経験をさせてもらっています。それは全て、「未来の看護の在り方」について考える良い経験となっているのだと実感しました。

ななちよ新聞

発行日

2011年03月31日



プロジェクトの説明

・今年度の活動の主体とは

七曲りでいっちょやったるか!では、一年目に制作した七曲り仏壇紙芝居「ゆうたとお仏壇」を媒体として、「七曲りはどんなところか」「仏壇職人ってどんな仕事なのか」というイメージをより多くの人に知ってもらえるように活動してきました。

特に、今年度は新メンバーの参入というプロジェクトにおいて大きな転機となりました。そのため、成果物にこだわる活動というよりも、新メンバーの地域との繋がりが強化が主体となった年だったと感じます。

ちよっと聞いてよ!

プロジェクト自慢

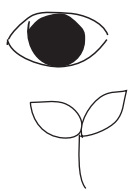
・紙芝居をしている団体……だけではない!

「ななちよ!」で紙芝居の読み聞かせをするときは、単独ではなく地元のイベントや他の近江楽座のイベントに呼んでもらいます。そのため、そこで配られたり売られたりしている美味しいものを食べる機会が多いのです。たとえば、恵比寿祭の日には高宮のおとくらで温かいおでんをいただきました。二月二十六日に七曲がり三軒茶屋で行われたモモノ樹朝市では、パンやケーキ、ジャムなど美味しそうなものばかりでつついという買ってしまいました。とても美味しかったですし、そこの店では売っていないものばかりで、見ているだけでも楽しめました。

また、さまざまなイベントにお邪魔しているので多くの人と出会えたり、普段自分では行かない場所に行ったり、読み聞かせでたくさんの子供たちと触れ合えたりしました。そのことも「ななちよ!」の大きな魅力のひとつです。

ななちよ! ビックニュース

・ななちよ!の新しいめ



ななちよ!では『新メンバーの勉強意欲を向上させよう』という気持ちからパンフレットを制作することになりました。読み聞かせの度に近江楽座や七曲りについてパネルで説明していたので、「ぼつと好きな部分/気になる部分を読めて、手元に残ってくれるパンフレット」は、ななちよ!でも大きな力になるのではないのでしょうか。

また、その話をお世話になっているNPO法人の柴田さん、そして職人さんにお伝えすると、「七曲り町歩きマップも欲しいね」とアドバイスをもらうことが出来ました。

新メンバーにとって、読み聞かせ中心の活動で、説明もパネルに表示されていて、それを伝えるだけでよかったものが、パンフレット制作において「自分の知らない七曲り」に再度出会うきっかけになっています。

職人さんへの聞き取りを新メンバーのみで、もう一度見直しました。今までの紙芝居制作メンバーとは、まったく違うメンバーの「パンフレット」は、どのように「七曲り」を伝えていくことが出来るか。乞うご期待



一年間を通した課題と成果

今使っている紙芝居は、少し不備が多いので、新しく頑丈な紙芝居を制作しようと考えています。読み聞かせについても、紙芝居をめくるタイミングや、セリフの言い方を改善して、もっとと見てもらう人に楽しんでもらえるように、紙芝居の読み手としてクオリティを上げていくことが課題です。



今年度は、色々な場所で読み聞かせをさせていただき、本当に多くの方に私たちの紙芝居を見ていただきました。私たちの紙芝居を通して、七曲りという地域や、仏壇職人さんのことを、多くの方に知っていただけたことが、何よりも嬉しかったです。また、見ていただいた方から、「この絵かわいいわね」や、「彦根に仏壇職人さんがいること知らなかった」と直接声を聞かせてもらえて、もっと頑張ろう!と力をもらえた一年でした。

地元の声

お世話になっていNPO法人リンクスさんの柴田さんと、お世話になっている井上仏壇の奥さんは、

「最近三軒茶屋の企画とのコラボで若い人がたくさん来て、みてくださっている。また紙芝居は人数を増やしているの、面白い。」

とってくださいました。また、

「七曲りのいる人たちは年配が多いので、学生の姿が増えるのはありがたい。またイベントの手伝いなどお願いしやすいのがよい。そして七曲りに住んでいなくても、できて大人としゃべれることは良いことだと思う。」

とも言ってくれました。

来年度計画している、「七曲りパンフレット」について構想をお話すると

「今年七曲りでするイベントには重要なものなので、

持つて歩けるパンフレットをしっかりつくってもらいたい。」

と期待を込めたメッセージをいただくことができました。

楽しく・おもしろくがモットー!

nanachoi!

って何？

企業・大学・福祉・地域の人たちと
「Communication」
よいよい社会に一步近づくための
「Challenge」
循環システム
「Circle」
これが「han



「Wel-Econogy」とは？

Wel...welfare (福祉), **well** (良い)

Econogy...**Economy** (經濟) + **Ecology** (環境)
+ **Technology** (技術)

新しい事業の創造 「Wel-Econogy」の提案!!

今年度、廃棄物バスターズは廃棄プラスチック循環システム構築のため、リサイクルプラントの原料であるPETボトルキャップを回収している滋賀県内の福祉施設を訪れました。

そこで目の当りにしたのは、作業所の方々の安い工賃でした。福祉施設の方々からの要望もあり、私たちはどうにかしようと考えて『hana・wa』プロジェクトを立ち上げました。知的障害者の方々が自分たちで仕事をしながら社会とのコミュニケーションを持つことを目的とし、「花のメンテナンスをする」という付加価値をつけることで行政や企業にリサイクルプラントを販売するということです。上西産業さんやアヤハディオさんとかとの価格交渉や企業へのPR活動・花のメンテナンス講習会などを行い、4月から旭化成、大阪ガス等6社で販売開始が決まりました。私たちはこの事業が作業所の方々の自立支援になることを願っています。

バスターズ新聞



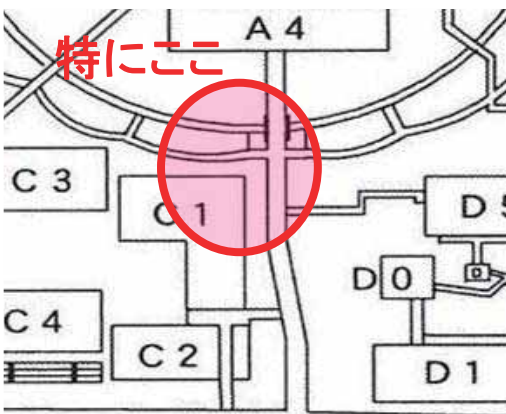
プラスチックの循環

廃棄物バスターズはプラスチックの地産地消を目標に様々な取り組みをしています。

今年度はこの取り組みとして、第一回廃プラ回収を県立大学南駐車場で行いました。結果は予想以上の大収穫！

今後とも様々なところで回収を行っていきます。次回は是非あなたもお越しください。

廃棄物バスターズからのお願い



今年度、私たちが行った違反駐輪の撲滅を目指してリサイクルプラントを設置しました。活動の成果もあり駐輪場所を増やしていただくこともできましたが、未だに違反駐輪が撲滅できていません。私たちは、新年度を迎えて新入生に県大の格好悪い姿を見せたくありません。違反駐輪を学生みんなで撲滅しましょう！

体操服完全循環型/サイクル
体操服から体操服へ



私たちの今年度の成果の一つに『エコサークル』マークが入った体操服を小学校へ導入したというものがあります。

この体操服はPETボトルのリサイクルのように「複数回リサイクルできない」ものではなく、繊維を原料の分子まで戻してからリサイクルすることで「何度でもリサイクル」できる繊維を使用しています。

私たちはこの体操服を導入するために小学校や体操服を販売しているトラヤさんなどに赴き交渉をし、教育委員会での校園長会議で発表してきました。その成果として4月から金城小学校での導入が決まりました。

今後、この『体操服完全循環型リサイクルシステム』を滋賀県内全体で広げる活動をしていきます。



グリーンカード

暑い夏を乗り切るためにエ
コなグリーンカーテンはい
なかですか？
私たちは今年近江八幡市や
大津市で環境クイズなどを
しながらグリーンカーテン
を広めていました。
今年の夏は是非あなたも
レッツグリーンカーテン！

今年を
振り返って

今年度の活動は、とても濃く年間計画を作製した当初よりも予定が増えました。活動を行っている間に課題や外部からの要望があり、とても活動範囲が広がりました。リサイクルプラントの原料調達先を辿りたくさんの出会いはありました。草津市清掃センターの方々、シャンプーや化粧品等の容器を回収しているノエビアさん、PETボトルキャップを回収している福祉施設の方々です。この出会いから新しい事業が生まれ、産・官・学・福の新しい環境リサイクルシステムの構築ができました。4月から始る『hanawa』や体操服循環システムは、今年一年間の集大成となります。

今後の課題として、リサイクルプラント・廃棄物バスターズの知名度はとても低いことがあげられます。

廃棄プラスチック回収イベントのPR活動に力を入れるなど彦根市民のゴミの行方を地域の人々へ伝えるべきであると考えています。

今後の廃棄物バスターズは近江楽座を卒業し、より学生主体の独自性のある活動を行っていきます。

Harmony新聞

2011年(平成23年)
3月31日
木曜日

東近江市社会福祉協議会さんから

表彰状をもらいました！

平成二二年十月二八日に東近江市立八日市文化芸術会館にて「東近江市「社会福祉法人 東近江市社会福祉協議会」が主催する「東近江市社会福祉大会」が行われました。

Harmonyはその大会において、東近江市社会福祉協議会会長表彰を受けました。学生が運営するボランティア団体としては唯一の受賞です。

東近江市で私たちの功績が認められた背景としては、一緒に活動しているNPO法人「障害者の就労と余暇を考える会 メロディー」の本部が東近江市にあり、そのためHarmonyの活動が彦根市内だけではなく、東近江市においても行われているということが、ひとつの理由として挙げられます。今回その功績が認められ、東近江市にて表彰状を得

ることができたというわけです。

Harmonyは本年度で創設して九年目になりますが、今回が初めての表彰となります。この表彰を励みに、今後も子どもたちと楽しみながら活動を継続していきたいと思っています。



ちよつとぎうてよ！

わたしたちの活動じまん

Harmonyでの活動を通じて、障がいを持った子どもたちに良い変化が訪れることもあります。たとえば最近では、活動に参加してくれているある男の子(A君)に顕著な変化が見られるようになりました。A君は、人との関係を築きにくい障がいを持っており、それまでは、私たちが話しかけても反応を示さず、活動にも参加しようとしないうちに自由に行き回っており、自分の世界に閉じこもりがちで

した。そのようなA君が最近では、自ら席について積極的に活動に参加したり、学生と手を握ってくれる、あるいは学生の名前を呼んでくれるなど、今まで出来なかったことをごく自然に行ってくれるようになりました。これまでに人

活動を繰り返すうちに、A君は彼に対して信頼を寄せるようになっていったように思います。そこから波及して、その学生以外にも関心が及ぶようになっていったのは、A君の成長にとって重要なことでは



定例活動で行っている散歩の様子



子ども達の粘土工作の作品

今年度の成果と課題

日ごろの活動での成果としては、これまで行っていた「茶道」「粘土工作」に加え、今年度から新たな試みとして「お絵かき」「散歩」というふたつの活動が導入されたことが挙げられます。「お絵かき」は「粘土工作」に取り組むことが難しい比較的幼い子どもを対象に行いましたが、以前「粘土工作」には取り組もうとしなかった子どもたちも、「お絵かき」ならば自分の創造したいものをより簡単に表現できるからか、積極的に取り組む姿をみ

ボランティアサークル Harmony の活動紹介

私たちHarmonyは、自閉症やダウン症といった、対人関係を築くことや他人とのコミュニケーションをとるのを苦手とする障がいを持った子どもたちと、茶道や創作活動などを通して関係性を築き、共に成長していくことを目的として活動しているボランティアサークルです。他にも、将来子どもたちが余暇活動を充実出来るように、宿泊体験やバス旅行など、さまざまな社会体験を行っています。『ハండి』をもっているために出来

ない」という思い込みや決め付けを取り払い、積極的にならゆることに挑戦しています。Harmonyでは、活動に参加する学生側が、単に奉仕精神に則って献身的なボランティアを行っているわけではなく、子どもたちも学生も含めて、皆が楽しく活動を行っていくことに重点を置いています。無理をせず、楽しみながら活動を継続していくことが、子どもたちや学生にとって大事なことだと考えています。

場所を探してみても「なか」という声がありました。そこで、市内で活動を行える場所を探してみたところ、中地区公民館の方々が快く部屋を提供してくれました。地域の方たちが私たちの活動を受け入れてくれたことにとても感謝しています。活動においては課題としては、長年活動が続けていくうちに、学生よりも年上にあたる子どもが出てきたことが挙げられます。これまで子どもたちの名前を呼ぶ際に「○○ちゃん」「○○くん」などと呼称していたのですが、一人前の大人に對してそのように呼び続けるのはいかがなものでしょうか。この問題に對して、私たちは今後しっかりと向き合っていかなければいけないと思っています。

運営面の課題としては、本年度は引継ぎの不十分さが目立ちました。そのため、イベントがあっても何をどのように準備すればよいのか分からず、周りに迷惑をかけてしまうことが多かったように思います。また、近年部員不足が続いていたため、個人が一人で多くの仕事を引き受ける体制が確立して

世界の

● 青年期に差し掛かる子どもにとって、同年代の人たちと関わる機会は少ないので、学生の人たちと交流が持てることはとても嬉しい。

● 学生が楽しみながら活動に参加してくれているから、子どもたちも気になって同じことをやる。人や物に興味を持つことは子どもたちが成長する上ではとても大切なことから助かる。

● 福祉従事者ではなく学生ならではの新鮮なアイデアが新しい活動へ結びつく。

● 長期間専属的にボランティアで関わってくれるところはめったにないから助かる。

YEARLY BASARA vol.1

特集

“近江のヒト,モノ,コト”

湖国の夏の暮らし
ここくらし展 開催

2011 年 2 月 25 日から 27 日にかけての 3 日間、本年度ここくらしプロジェクトの集大成として、京都祇園のギャラリー「空鍵屋」にて「ここくらし 湖国の夏」展が開催された。当チームの活動内容である「ここくらし」プロジェクトへの参加。ここくらしとは、信楽の窯元である明山陶業がまとめ役を務め、滋賀県で作られ滋賀県の暮らし

の中で使われる伝統的な産物を一つに集めて展示することによって現れるどこか懐かしい湖国（ここく）の暮らしの風景を「ここくらし」と名付け、モノを通して企業と学生が連携して滋賀県の情報発信していく活動である。学生が各自でアポイントメントをとり、合計で 15 を超える伝統産品を製造しておられる企業や職人の方々から賛同・協力を得ることができた。また、その他にも県内の様々な方の協力を得て県内での展示会を重ねることで活動の輪を広げている。この京都での展示会



ここくらしの今年の活動を締めくくるもので、1 年間の成果の発表・展示を行った。今回の展示会ではメンバーそれぞれが各自担当した伝統産品を紹介する「ここくらしな」というパンフレットを制作し、それを購入者が自分で選択・封入できるパンフレット BOX という形で販売された。ここくらしなは、それぞれ異なった形状や形式をとっており、場合によっては伝統産品の繊維サンプル等が付属しているものもあるので、購

入者はサンプルの色や柄を熱心を選んでいった。一方、2 階展示場には産品の組み合わせに展示によって「夕涼み」「昼寝」「晩酌」の三つの湖国の夏の風景が生み出されていた。また、初日の 18 時からは関係者を招待したレセプションパーティーが開催され、全開よりも多くの参加者が来場した。このパーティーでも今後の展望についての話や各産地同士での交流が行われ、学生メンバーが各産地を繋ぐ架け橋的な存在となっていた。



■ profile

・チーム名
長浜 BASARA
・プロジェクト名
湖北戦国プロジェクト
滋賀県湖北地域が今年度 NHK 大河ドラマ「江～姫たちの戦国～」の舞台として選ばれたことから、全国から滋賀県に訪れる観光客の大幅な増加が予想される。この機をチャンスと捉え、県内各産地の“モノ”を通して滋賀県全体を PR していくことを目的として設立された。設立当初は湖北地区を中心に LLP 歴屋との協力のもと戦国グッズの企画 PR を企画。活動拠点を失うが、浅井三姉妹をモチーフとしたキャラクターを中心としたイベントや企画会議に参加。また下半期より大学院の授業と合同して滋賀県の伝統産品 PR 活動として“ここくらし”に参加。メンバー各自が各産地を訪問し職人の方々に協力を呼びかけそれぞれの伝統産品を一つにまとめた展示することで生み出された夏の暮らしの風景を通して近江の伝統産業の歴史や情報を発信していく。近江のヒトと出会い近江のモノを通して近江でコトを起こす。

“ここくらし”活動の規模拡大を目指し
Interior Lifestyle TOKYO 出展

本年度の活動は県内での数回の展示と年度末の京都での展示によって、発表の場を設けることができたここくらしだが、更なる発表の場や、他の企業や団体、また、他府県との情報交換や交流の拡大をねらい、2011 年 6 月に東京ビックサイトで開催されるインテリアの専門国際見本市である「Interior Lifestyle TOKYO」に出展することを計画している。この見本市への出展は、国際市場への情報発信にも効果的であり、今までの地元密着的なタイプの展示会とは異なりもっと広い規模に、より商業的な意味合いでの情報発信が可能になるだろうと思われる。本年度はその活動のほとんどを、歴史的文化的な価値の情報発信の役割を担っている学生チーム主体で運営してきたが、来年度よりプロジェクト全体のまとめ役である明山陶業が運営に大きく関わってくことで、その他賛同企業も含めた企業側による商業的な活動も大きく展開されていくと推測される。今後は、協力企業の拡大をはかりつつ、観光客や県民向けの滋賀県内での展示会での情報発信や関西圏及び都心周辺での PR 活

動を通して、企業へのフィードバックや、そこから生まれる企業側からの新しい企画等の展開など学生チームの情報発信と企業側の商業活動を織り交ぜて活動していく。その第一歩として「Interior Lifestyle TOKYO」への出展はぜひとも成功させたいとの意気込みで臨んでおり、早速この企画を知った県内の強化ダンボール製造企業より展示ブースの協力申請も出ている。一方、この活動とチーム発足当初の目的である大河ドラマでの集客に合わせた PR 活動としてのチームの活動結果も残せればと考えている。「歴屋」「プロジェクト A3」と「ここくらし」を結びつける展開にたどり着くことができれば、各産地とコラボレーションした戦国グッズの開発や、湖北町周辺で開催されている大河ドラマ関連イベントでのここくらし展示の開催等が望める。滋賀県全体を歴史的・文化的にも経済的にも活性化させるためにも、「ここくらし」というモノを作る人々と、大河ドラマ関連イベントとしてコトを起こしている人々とを結びつけることが今後の課題である。



プロジェクト A3 に参加



チーム発足当初予定していた LLP「歴屋」との活動は、活動拠点である長浜の店舗退却によって、商品開発等の活動や学生主体のイベント企画等が困難になったものの、歴屋の橋本治雄氏が代表を務めておられる浅井三姉妹合同キャンペーン委員会の「プロジェクト A3」とのイベント企画に参加をすることで継続された。2010 年 10 月 3 日、小谷城跡地のふもとで開催された「小谷城ふるさと祭り」ではイベントスタッフとして参

加。当日会場にて出展された歴屋販売ブースの営業や、浅井三姉妹をモチーフにしたゆるキャラ、茶々姫、初姫、江姫のサポート等を行った。また、小谷寺周辺で開催された 2011 年カウントダウンイベントに向けての企画会議が 2010 年末から湖北町商工会議所で行われ、当チームも会議のメンバーとして参加した。ゆるキャラのキャラクター原案者や彦根及び湖北町周辺から集まった各企業や団体の代表者が集まって開かれた会議では、実際にイベントにて開催される企画やタイムテーブル、現場設備の手配や当日振る舞われる甘酒やおでんの食材の手配等の打ち合わせや、正月に配布されるゆるキャラからの年賀状の案等の打ち合わせが行われた。

ここくらし
近江八幡展
能登川展

2010 年 12 月、第一回目のここくらし展が近江八幡にあるギャラリー「天籟宮」で開催された。この展示会は一般には公開されず、今後の活動に必要な資料としての写真を撮影するために開催された。厳しい寒さの中写真撮影もまた県内にて活動されているフォトグラファー尾崎正樹氏の手によって早朝から日暮れ以降まで行われた。この日撮影された写真は、以降の展示会において各発行物やパネル展示等に利用されている。

2011 年 1 月、第二回目の展示会が能登川「紹紹の家」で開



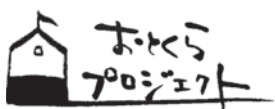
催され、同時に各産地の職人の方々を招待したレセプションパーティーも開かれた。この会では担当教員である印南比呂志教授からここくらしの開催意義や今後の展望についての演説があり、またメンバーがそれぞれ制作する各産品を紹介する PR ツールとしてのパンフレットの案を各産地の方々に発表した。その際に各職人の方々からのヒアリングも行われた。その後食事会を通して職人の方々どうしでの交流が行われ、コラボレーション企画や新商品の開発などの話で盛り上がっていた。

産地のこえ

ここくらしの活動を通してメンバー全員はそれぞれの企業や職人の方々からヒアリング調査を行った。伝統産品によっては精力的に活動をされている企業もあれば、一方で、もはや廃業状態に近い職人の方もおられたのがリアルな現状である。そのような中でも、パーティー等で集まった各産地の方々は滋賀県全体をモノ作りで盛り上げていこうと一生懸命だった。その姿勢が通じ合って企業同士での交流で盛り上がったたり、また会場に来られなかった方々もプロのフォトグラファーが撮影した自分の商品や展示・交流会の風景写真をみたり、活動の途中報告をするたびに喜んでおられた。また、歴屋代表の橋本氏は活動形態の変化に伴って、ウェブ販売や、イベント時の出店を狙った新商品の開発を計画しておられ、ここくらしの活動報告に興味を持たれていた。



おとくらプロジェクト



「おとくら」って？

おとくらはじまり

滋賀県彦根市は高宮町という小さな町に、ある一軒の古民家がありました。その民家の前には中山道が通っており、江戸時代には多くの人や店が賑わっていました。高宮では高宮布という麻布のブランドが有名であり、その古民家でもかつては高宮布を取り扱う問屋として商いをしていた歴史がありました。

しばらくの時間がたち、その布問屋さんは場所を移す事になり、その次にその古民家がつかられることになったのは金物屋さんとしてでした。その金物屋さんもしばらくの年月をへてそこでは営業まもなく、ついに店の空間は用途の無いものになってしまいました。せっかく長い歴史を積み重ねてきた空間なのに、このまま活かされずに



は滋賀県立大学の学生に空間活用のアイデアを募る事にしました。建築やデザインに興味のある学生たちが、案を持ち寄りの、その中から選ばれた案から一つのプロジェクが充足しました。それがこの「おとくらプロジェクト」です。

おとくらのなかみ

プロジェクトの名前にもなっている、「おとくら喫茶」ですが、これはどういう意味なんですか？とよく聞かれます。ここで答えましょう

放っておくのはもったいない、何かこの高宮を活性化させる為の場所に出来ないだろうか、そう思い立った金物屋のご主人

空間にしたいというのが軸にありました。しかし、ただの喫茶店では個性がありません。そこでプラス要素を何にしようかと考えた時、出てきたのが「音楽」でした。音楽はその場の空気を一変させる力をもっています。何もなかった空間に音楽がプラスされる事で、がらっと空間の色は変化します。

誰かがギターを弾きはじめるとそこにピアノが重なって来たり、歌声が重なって来たりと、どんどん音が豊かになり、その合奏がとても楽しいものになります。私達は、その楽しさはあつた事の無い人、面識の無い人同士のつながりを生む事のできる物だと思いました。

喫茶スペースではお茶を楽しむながら、その時々によって変わる空間に広がる音楽を愛でる時間、それはなかなか贅沢なものです。こうして歴史を経てきたこの古民家はまた新たな空間として生まれ変わったのでした。

DIG:STAFF

ドリッップ講習会

スタッフのほとんどがドリッップ初心者という事で、異様な緊張感が漂っていたが、先生をしてくださった人組ユニット、ひつじぐも、さんのやわらかな雰囲気、スタッフの緊張もほぐれる。見本を見せていただいたあと、一人一人見よう見まねで入れていく。それをみんなが、上手！とワイワイとコメントが飛び交い楽しい中講習会は。終了した。おふ

たりに入れていただいたコーヒーはやさしい味がした。あれから色々なところでコーヒーを飲むが、作業がシンプルで、味に個性が出る。感じた。ひつじぐもさんのコーヒーはやさしい味、プロが誇りを持ってドリッップした。コーヒーは濃厚な味。おとくらの味と私たちのお客さんへのきもち。私たちのコーヒーはどんな味がするだろうか。



学生企画

高宮神社で竹のワークショップ

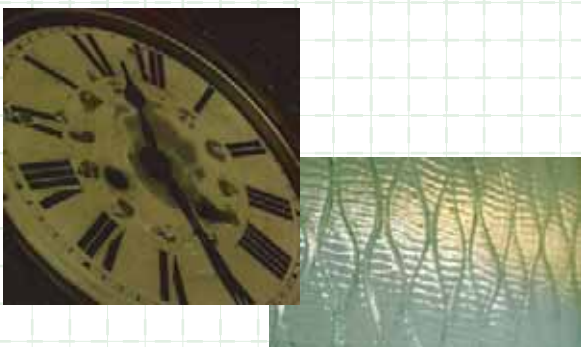
今回竹を使ったワークショップを企画したのも、竹林プロジェクト、エコキャンパスプロジェクトの方に協力して頂き、企画運営をしました。はじめは、こんな企画で人があつまるのだろうか、と不安でしたが、当日まで連日申込みがあり、あまりの人数にスタッフ

も大慌てでした。作ったものは竹とんぼ、水鉄砲、バームクーヘンです。はじめに竹とんぼ作りをしました。竹とんぼの部材をあらかじめ作っておき、子どもたちが少し削るだけにしたにもかかわらず、な



かなかうまく削れません。子どもたちは慣れない手つきながらも、一生懸命竹を削っていました。作った竹とんぼはそれぞれ個性がありましたが、どの子も作った竹とんぼを自慢げに大空へと飛ばし合っていました。

はじめは、水がうまく穴からでず、何度も作り直しをして、試行錯誤で作りました。びしょぬれになりながらも、最後まであきらめず作っている姿がとても印象に残っています。



次に太い竹と細い竹を組み合わせてつくる、水鉄砲を作りました。竹は子どもたちが、自ら水鉄砲に使う長さまでのこぎりて切り、スポンジと布をうまく使って作りまし



合同イベント おとくらにて

野菜の販売

とよさらださん、一姓さんと何かイベントを出来ないかと3プロジェクトで話し合い、おとくらで開催されるコンサートと一緒に野菜の販売を行う計画が動き始めた。

他の楽座の方と、一緒にイベントを行う事自体が初めてで最初は戸惑った。初めこそあった。しかし、ミーティングを重ね、各プロジェクトの特色と人数をいかして、チラシをつくり、ポスティングを行ったり、地元学などを授業でもアピールを行い、徐々にイベントを作り上げていった。

イベント当日、朝早くから、とよさらださんがスイートポテト作りにいそいそと、私達も会場の設営など慌ただしく時間が過ぎていく。そして、お昼を過ぎたあたりから、ぽつぽつ足を止め

て、野菜を見ていくお客さんが...野菜の販売は夕方まで行われ、寒い中行われたイベントだったが、イベントの来場者からチラシをみて来て下さった地域の年配の方まで幅広い年代の方に足を運んで頂き、一つのプロジェクトでは味わうことの出来ない達成感を感じた。





Living Design 14th FASHION SHOW

私たち生活デザイン学科 14 期生は、滋賀県で生産された布を使って服をつくり、それをショーで披露するという活動を主に行っています。今年は県内の布会社 5 社を訪問して生地を提供していただきました。布の特徴を活かしたデザインを考え、地域に発信していきます。更に今年度はショーの実施に加え、こどもデザインと小物販売を企画して行いました。

石山商店街でのショーに始まり、朴アート祭、ピバシティー、湖風祭といったイベントに参加してショーを行いました。集大成である湖風祭のショーでは、照明や音楽などの構成に更に力を入れ、92 着の作品を披露しました。

「こどもデザイン」では、地元の子供達に服のデザインを募集し、その中から計 10 着を制作しました。作品はショーや展示会で披露し、多くの方に足を運んでいただきました。

「小物販売」では企業から提供していただいた布を使って小物の制作を行い、石山商店街夜市や朴アート祭で販売しました。興味は持っていただいたものの、売り上げにはつながらず、課題が残るものとなりました。



ビッグニュース

— こどもデザイナーがデビュー! —

10 月 10 日に彦根市のピバシティーでファッションショーを行いました。ここでは学生たちが作った 40 着の作品に加え、地元の子供たちが考えた作品 3 着を披露しました。

ピバシティーでは毎年、買い物途中の親子連れがたくさんショーを見に来てくれます。こどもデザインを披露するにはもってこいの機会だと思い、本人とご家族に「一緒にショーに出ていただけませんか」と連絡をとったところ、快く引き受けて下さいました。

当日は細かい打ち合わせやリハーサルはなく、ぶっつけ本番でした。どうなるかヒヤヒヤしましたが、モデルと子どもが手をつなぎ、笑顔でランウェイを歩きました。会場の空気はあたたかく笑顔に包まれ、ショーは大成功に終わりました。出てくれた子どももとても満足気。こどもデザイナーの誕生です。



プロジェクト自慢

朴アート祭では、神社境内の参道を使ってショーを行いました。モデルがスタンバイをする場所もないので、灯籠を利用して黒い不織布を貼り、舞台袖をつくることから始まります。ファッションショーと言うと、ステージ上でライトを浴び・・・という印象が強いですが、こんな場所でもショーを行っています。

この朴でのショーは、彦根市の美容室 ask さん・RAS HAIR さんとのコラボレーションでもありました。この企画も今年で 3 回目になります。事前にデザイン画のチェックや打ち合わせをして、要望に合わせてヘアセットをしていただきました。神社の境内という、異空間ながらも見応え十分なショーになりました。



地域の声

こどもデザインでは、デザインをしてくれた子どもやそのご家族から「作ってもらうことができて嬉しい」という感想をいただきました。観てくれたお客さんからは、「よかったよ」という感想だけでなく、「もっとメディアを利用するべきだ」といったアドバイスをいただくこともありました。客観的に評価していただくのはとてもありがたいことです。受け身ではなく、自ら意見をもらいにいくことも大切だと感じました。

協力団体さんからは「来年も一緒にイベントを盛り上げてほしい」という声を多く頂き、私たちも嬉しくなりました。このつながりを大切に、来年以降も地域のみなさんと一緒に活動をしていけたら良いと思います。

一年間の活動を通した課題と成果

今年度はこどもデザインをはじめとして、地域の方に服作りの面白さを感じてもらうことができました。子ども参加のショーが 1 回しか行えなかったのは残念でしたが、地元の子どものアイデアを取り入れたということで、地域の人も学生も、服作りの新たな可能性と喜びを感じることができたと思います。また、ご協力いただいた企業や団体の方々との交流を通して、今まで以上につながりを深めることができました。

課題として残ったのは、小物販売や情報の共有不足です。小物販売ではメンバー間で意識の差があり、モチベーションが下がってしまいました。ショーの運営ばかりに目が行ってしまったのも原因の 1 つです。また、大人数のため全員が活動や話し合いに参加できる日が少なく、情報の共有がうまくいっていませんでした。毎年メンバーが入れ替わり、何が大切か、いつ何をすればいいのかが把握できていないため、引き継ぎをしっかりと行うことや、同学科の 1、2 回生にもコアメンバーとして活動してもらうことが必要だと思います。



信楽人とは、滋賀県立大学の有志の学生が集まったグループです。信楽町をフィールドとして、今年で結成四年目です。メンバーは環境科学部の建築を学ぶ学生と人間文化学部でデザインを学ぶ学生が主です。活動内容は四年間で徐々に広

信楽人とは？

がつていき、初期は建物の改修作業が主でしたが、shiroiroirieが、でき、ギャラリーの企画運営、接客、印刷物の作成、Ogammaでは、歴史の調査、パネル作成、など今では多岐にわたっています。普段学生は学校では設計演習など図面や模型などの課題でものを作っています

物を作るということ。また作ることと社会とのかかわっていくことを通して、もの作りの大変さや面白さを学ぶことができます。プロジェクトには多くの専門業者さんとかかわることが多く、現場で学ぶことができます。という貴重な体験を通して学生は飛躍的に成長を遂げ、一年が過ぎると見違えるほどです。



今年度Ogammaでは学生のプロジェクトメンバーを新規でスタッフを雇用していただいたことで、拠点を維持管理し、継続することができ体制ができています。それに伴い、信楽の情報発信を行う拠点が二つに増え拠点が線になりました。今後はこの線をつなげて面へと展開したいと考えています。

しかし課題が二つあります。一つは技術や知識の継承です。今年度作業を行った



信楽まちなか芸術祭開催

—まちなかにアート、まち全体が美術館に—

滋賀県甲賀市信楽町で平成二十三年十月一日から十一月二十三日まで、「信楽まちなか芸術祭」が開催されました。陶器の製造を営む窯元が集まる長野地区、他には紫香楽宮、M・H・Oミュージアム、陶芸の森、朝宮茶で有名な朝宮地区といった、今までは個別に特色ある場所として広報していた地区が全て集まる。信

楽において今年度最大のイベントでした。信楽人はこのまちなか芸術祭にて①登り窯を改装した「Ogamma（おおがま）」でカフェ、ショップの運営。②昨年度まで改装を行っていた「shiroiroirie（しろいりいり）」で上田三佳氏、輪島キリモトの両氏の企画展示。③窯元とデザイナーが新しい信楽焼を創る「ラ



学校で学べないことを現場で学ぶ!!

イフセラミックス展」の作業補助を行いました。

Ogammaでは登り窯の中で、明山陶業に伝わる朝鮮通信使献上食器について調査を行い、まとめたパネルを展示した。Ogammaの登り窯は昭和初期に建造されたものと

言われ、多くの陶器を焼成してきた。現在は使われていないが、昔陶器が作られた登り窯の中で、陶器の歴史について知ることができるとい

陶器の町特有の展示空間となりました。またカフェ、ショップには地元の方、観光客の方々が数百人訪れていた

き、窯元散策路を歩いてきて、坂を上った先にあるOgammaで一息ついて、信楽の町を

楽しんでいただくことができました。ではないかと思

shiroiroirieでは企画展示に合せ、かえるさんこと滋賀県立大学の細馬先生によるライブ、県大OGの

上川さん企画の芋煮会を行うなど、信楽人が改装してきた拠点を活かすことが継続して行われています。

ライフセラミックス展は陶器を作るプロの窯元さん、デザインを行うプロのデザイナーが共同で新商品の開発を行う現場で、作業補助を行いました。プロとプロ

がぶつかり合う現場で、本当にいいものを作り上げるために必要な熱意や行動を直に見て学びました。

まち全体が盛り上がり、観光客の方、地元の方が楽しそうに信楽のまちについて語っている姿を見ると、やっぱり信楽という町は改めておもしろいと感じ、それは陶器を製造してきた町特有の街並み、それだけではなく、外部から入ってくるヨソ者である私達を快く受け入れてくれた、信楽の町の人のおかげだと感じました。

2011年 平成23年)
3月 31日
木曜日

陶器とアートと信楽



圧倒的な存在感の登り窯

Ogammaの登り窯は昭和初期に建造され、当時暖房器具として主流であった火鉢など大物陶器の焼成を数多く行ったとのこと。陶器の生産のサイクルや手間がかかることから、現在ではガス窯や電気窯に取って代わられています。土と煉瓦で造られた構造物は

圧倒的な存在感を放ち、観光客は必ず登り窯の前で足を止めるほどです。登り窯で焼成をする際、一番下の火袋（ひぶくろ）で薪を燃やし、千三百度まで温度が上がったら蓋をし、次に上の部屋の横から薪を投げ入れ温度を上げ、温度が上がったらまた上の部屋へと順に焼成を行います。薪には松を使用することで松脂が陶器の表面に付着しますが、登り窯の内側の壁にも付着します。その壁はビードロ色のガラス質で、何度も焼成しないと付かないため、見ていると吸い込まれそうなくらい綺麗な色彩です。

登り窯の改装の作業を行っている近所の方が招いてプレオープンを行った席で、登り窯を維持保存していくことの重要性を熱く語っていただき、自分たちが行ってきたプロジェクトが、実際に地域のためになっているという



拠点を点から線へ線から面へ展開

「昔よくこの登り窯でかくれんぼして遊んだなあ」

でひとつ鍋を囲んで、松茸入りのすき焼きをしたことなど、この登り窯にはたくさんの方の思い出が残っているのだということを教えていただき、プロジェクトの重要性を再認識しました。

バンデイラジオーロ

発行日
2011年3月31日

お楽しみ会大成功！

私たちは月に一回、コレジオサンタナでお楽しみ会を開催しており、一月は漢字を書く楽しさを知ってもらおうと考え、習字を書いてもらいました。ほとんどの子どもたちが筆を持つのは初めてであるにもかかわらず、皆楽しそうに取り組んでくれました。筆の持ち方や半紙の使い方を説明するためには、日常生活でほとんど聞くことがない日本語を使用するため、子どもたちに伝わるか不安でしたが、ジェスチャーなどを交えて説明すると、子どもたちも理解しよつと真剣に聞いてくれました。

授業中は「何て書くかな。」先生、「これはどうするの。」など、いつも以上に声をかけてくれ、ひとりひとりがつくり接することが出来ました。授業の最後にはひとりずつ前に出て自分の作品について発表をしてもうい、その時の作品は今も教室に飾られています。

このように、日本語指導はもちろん、日本の文化に触れてもらういい機会になり、一月のお楽しみ会は大成功だったと言えます。

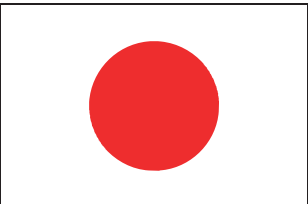
クリスマス会大盛り上がり！！

去年の十二月二十四日には、ブラジル人保育園であるペケーノポレガールにて、クリスマス会が行われ、我々バンデイラジオーロもこれに参加しました。日本ではクリスマスは子どもたちにとって一大イベントですが、ブラジルの子どもたちにとってもそれは同じです。いえ、日本人以上かもしれない。ブラジルの人々はお祭りなどのイベントを大々的に行います。この日は、いつも以上の人数の子どもたちが保育園に集まってきて、お昼から子どもたちはとても元気！。どんなプレゼントがもらえるのか、どんなケーキが出てくるのかなど、これから来る楽しいことを考えて、終始ハイテンションでした。園内は、本当ににぎやかでお祭り状態でした。私たちが、クリスマス会を盛り上げるために仮装をして登場すると子どもたちもとても喜んでくれました。

子どもたちのプレゼントは、我々の関連団体であるセスタバジカの会の寄付金で購入したのですが、学生がひとりひとりの性格や好み、年齢等を考慮して選んだものを渡しました。ラッピングも学生の手で行いました。そのプレゼントはサンタに扮した学生が子ども一人ひとりに手渡ししていき、プレゼントをもらった子どもたちはとてもうれしそうに、こちらも幸せな気分になりました。



県大発！！大好きブラジルプロジェクト



バンデイラジオーロとは

バンデイラジオーロとはポルトガル語で「旗」を意味します。私たちは、彦根市のブラジル人保育園「ペケーノポレガール」と愛荘町のブラジル人学校「コレジオサンタナ」で、子どもたちへの日本語指導を行うとともに、図工やお菓子作りなど子どもたちと遊ぶ楽しいイベントも企画しています。

また外部講師を招いて日本語指導の教授法やポルトガル語について学んだり、また日本各地での先進的な活動を視察するなど、より良い支援活動を行うために、様々な取り組みをしています。

成果と課題

定期的にコレジオサンタナやペケーノポレガールに通うことで生きた日本語を楽しみながら学ぶ機会を作ることができました。また、お兄さんお姉さんの存在としてもかわかることができました。そして何より、活動する上で一番重要な信頼関係を子どもたちや先生方と築けたことは大きな成果です。

今後の課題は、効果的な活動を行うためのメンバー増員や、県内のみではなく、県外にも我々の活動を発信しネットワークを広げることです。そして、かわいい子どもたちのために、我々もポルトガル語や日本語の指導方法をしっかりと学んでいき、より充実した支援が行えるように活動していきます。

私たちのジマン

子どもたちは、本当に我々を必要とし、毎週来るのを楽しみにしてくれています。それは嬉しいことであり、我々の励み、活動の原動力になっています。また、私たちの活動では、ブラジル料理を食べたり、それを模擬店で販売したり、ブラジルの遊びと一緒にやったりと、異文化を知る機会があります。十一月の彦根市のお城祭りでは、コレジオサンタナの方々と一緒にブラジル料理「パステル」や「シュラスコ」を販売しました。このように異文化を知ること、新しい発見も多くとても楽しいです。また、それを通じて互いの価値観や習慣などを学んでいます。そのことが共生の第一歩になると考えています。

地域の人の声

私たち学生が週に数回、小学校や保育園に行くだけでも子どもたちはとても喜んでくれます。普段親御さんが忙しく、一緒に過ごすことのできる時間が短いためです。また、スタッフの方々にとても、子どもに対して保育士の人数が不足しているため、とても助かっています。

また、われわれと同様に、地域の外国人の子どもへの教育支援に長年携わっている平田輝子先生は、このように話しています。学生がこのような活動に参加してくれてとても嬉しい。学生がこのような活動すること、若い力で地域を活性化させることが出来る。また、この思いをつないでくれることで、長期にわたってこの活動を継続させることができる。バンデイラジオーロにはそのような団体になつてほしい。地域の人々からも、われわれの活動には期待が寄せられているのです。





いしアート：川村浩一（代表&発表者）、林 宏美（発表者）（滋賀県立大学大学院）石川り瀬、達脇知弘（滋賀大学大学院）川村公也、柴田侑典、工藤 愛、深尾幸秀、村山圭祐、山田美津記、山本愛子、畑村勇気（滋賀大学）近藤美乃里（フリー）／担当教員：佐々木一泰、森川 稔／協力：石山商店街、知的障がい者授産施設 瑞穂、大津の京阪電車を愛する会、京阪電気鉄道株式会社（石坂線みんなで文化祭）、麻田有代（筆遊びのWS 講師）、白田祥章、丸山 桂（写真のWS 講師）、若山義和（陶芸のWS 講師）、鈴木由佳子、友光仁美（写真）、辻村敏之、中堀 努（映像・編集）、三澤明美（映像提供）、川口 歩、山崎沙織、箭野 遥（陶芸のWS 臨時スタッフ）、大林みさよ、鈴木麻里、高橋真希、中上ちえ、吉田 綾（巡回展担当）／協賛：滋賀県立大学 近江楽座、平成22年度滋賀県にぎわいのまちづくり総合支援事業



陶芸のワークショップ

日時：2010 年 08 月 28 日（土）13:00
～ 17:00 場所：石山商店街 空き店舗マルビー（大津市栄町4-8）アーティスト：若山義和（唐橋焼窯元）参加人数：38 人
参加店舗：9 軒 ファッションやまます／DO-UP／（株）鶴屋／クレープ・モン・レーヴ／カドーパン店（株）／LONG／三共ストア／山善寝具／YOUR SHISEIDO 幸田 スタッフ：14 人 カメラマン：丸山桂（写真）



筆遊びのワークショップ

日時：2010 年 09 月 26 日（日）10:00
～ 16:00 場所：東レグラウンド（大津市）石山商店街主催のとれ取れ見本市祭での開催 アーティスト：麻田有代（数奇和大津）参加人数：50 人以上 スタッフ：8 人 カメラマン：友光仁美（写真）丸山桂（写真）、中堀 努（映像）



01 陶芸のワークショップ お店見学の様子／02 ワークショップ会場／03「石山商店街のアートさがし」石山アートプロジェクト巡回展 その2」期間：3月8日～21日 場所：大津マルコ／04 回転する展示の様子／05 石山アートプロジェクト2010パンフレット／06 石山アートまつり会場／07 招き猫になる店主／08 トウキョウ建築コレクション2011プロジェクト展 発表日時：2011年3月3日 場所：スタジオ・ヒルサイド（東京・代官山）

今年度、滋賀の京阪電車を愛する会主催の京阪電車「石坂線みんなで文化祭」とのコラボレーションが実現し、「みんなで招き猫探し」を実施しました。今後も京阪電車と協同しながら、より多くの地域活動と連携したプロジェクトへ発展させたいと思っています。また、プロジェクトチーム「いしアート」に滋賀大学教育学部の学生が加わりました。参加者のほとんどが美術教育コースの学生であったことからアートプロジェクト、ワークショップへの関心があり、積極的な参加につながったと思います。初期のワークショップ企画会議では、方向性の違いを少し感じましたが、テーマを設定してからは目的を共有でき始めました。

BIG NEWS ネットワークの広がり 京阪電車とコラボレーション



写真のワークショップ

日時：2010 年 11 月 06 日（土）13:00
～ 17:00 場所：石山商店街 空き店舗マルビー（大津市栄町4-8）アーティスト：白田祥章（ロケット探偵団）、丸山桂（ロケット探偵団）参加人数：20 人 スタッフ：10 人 カメラマン：鈴木由佳子（写真）、辻村敏之（映像）



版画のワークショップ

日時：2010 年 11 月 20 日（土）13:00
～ 17:00 場所：石山商店街 空き店舗マルビー（大津市栄町4-8）アーティスト：知的障がい者授産施設 瑞穂 コーディネーター：林宏美（滋賀県立大学大学院）参加人数：23 人 スタッフ：4 人 カメラマン：丸山桂（写真）、辻村敏之（映像）

Introduction 二年目のプロジェクト

石山アートプロジェクトは、石山でしかつけないアートを制作し、ハンディキャップを持つ人・アーティスト・地域の人・商店街の人・学生、それぞれをつなぐプロジェクトです。二年目となる本プロジェクトは昨年度の取り組みをフォーマットとし、もう一度なぞらえてみることでプロジェクトの比較や課題を分析。今後の活動の方向性や位置付けについて検討しています。また、なぞらえながらも新たな取り組みにもチャレンジし、プロジェクトの内容を発展させ、プロジェクトのブラッシュアップを図りました。

voice

わー 飛んだ飛んだ飛んだ飛んだ

筆遊びのワークショップでは、手すきの和紙に筆遊びをしたあと、それを風にして飛ばす企画をしました。車イスでの参加者もあり少し不安な面もありましたが、いざ飛ばしにいくとうまく風が揚がりました。会場からは「わー飛んだ飛んだ飛んだ飛んだー！」と声が上がった感動的なものでした。

プロジェクト自慢

トウキョウ建築コレクション2011 プロジェクト展に出展

様々なワークショップの手法をもちい、多角的に石山の街を捉え直していることが評価されました。昨年度のワークショップの手法を引き継ぎながら、空き店舗の中だけで完結させず積極的に街と関わりを持てる内容を目指しました。参加者が主體的に街を観察できるアプローチをとることで、街との関係を築ききっかけになると考えています。ワークショップを通じて経験した街との関わりが参加者の中に蓄積され、街に対して親近感を生んでいる様に感じました。



石山アートまつり

期間：2010 年 11 月 13 日（土）～30（火）10:00～18:00 水士日はプチカフェ（空き店舗を完全開放）月火木金はガラス越しの鑑賞（シャッターのみの開放）会場：石山商店街 空き店舗マルビー（大津市栄町4-8）石山駅から徒歩5分 来場者：延べ89人 カメラマン：丸山桂（写真）

成果と課題 一般化にむけて

プロジェクトの継続を考えるうえで一般化する必要があると考えました。これは毎年メンバーが入れ替わっていく学生の取り組みを見ていて感じたことです。プロジェクトの継続のため、知識や情報を共有できる仕組みづくりにも取り組みました。プロジェクトに携わる商店街の人や施設の人、またアーティスト、学生が一同に意見交換、情報交換できる機会を設け一般化に向けた組織化に試んでいます。また、組織化に伴いプロジェクト全体の方性をまとめるテーマが必要となり、「人と人と街がつながる風景」というテーマを設定しました。様々な立場の人がいる組織の運営に実験的に取り組んでいます。

